

鳥取市の湖山池沿岸、三津集落に伝わる伝統的な漁法に「石がま漁」があります。真冬の寒さの厳しいころに行われる追い込み漁で、おもに寒プナを捕獲します。江戸中期の「元禄年中」(1688年～1703年頃)に始まったといわれます。かつては80数基ありましたが、現在使用されているものは4基のみとなっています。



『三津地区石がま保存会』による
田中善蔵家 石がま改修風景(平成18年8月)

石がま漁 にかくされた知恵

石がま漁には、先祖から受け継いださまざまな知恵が凝縮されており、合理的にフナを捕獲するための仕組みがあります。「石がま」は、石を積み重ねた漁礁のようなもので、越冬のため集まったフナを朝から夕方までかかり捕獲する追い込み漁です。石積の構造物を利用した追い込み漁は全国でもここ湖山池にしかないようです。この漁法は、石がま上部に10人程が乗り、石と石の間の「つき

穴」に勢いよく松の棒を出し入れし、フナを脅して前から後ろに移動して行きます。最終的には石がま後方部の捕獲部となる「胴函」に追い込みます。胴函は木製の箱で、左右に付けられた「開き」という板がフナを箱

の内部に導く仕組みになっています。

追い込み作業を終えると胴函の閉じ板である「樋戸」を上部から差し込んでフナを閉じ込めます。そのあと掬網でフナを残らずすくい上げ、漁は終了します。

胴函の原形は、古くから溜池などの排水口に設置される「樋門」にあるようで、漁の捕獲部に応用して取り入れたものではないかと考えています。閉じ板を「樋戸」というのはそのためでしょう。江戸時代、半農半漁の暮らしから得られた先人たちの知恵なのです。

いとうやすはる
(やまびこ館 学芸員 伊藤康晴)

おうちだに
画報

※やまびこ館では、1月13日午前10時から「常設展示ギャラリートーク」を行います。今回は「湖山池の石がま漁」の展示コーナーを中心に説明したいと思います。

■問い合わせ先 やまびこ館 上町88
(0857) 23-2140



■問い合わせ先
さじアストロパーク
佐治町高山1071-1 ☎ (0858) 89-1011

星の集まり「すばる」

「すばる」と聞くと、歌や車を連想される人が多いと思いますが、実は星の名前です。

最近の夜7時ごろ、東空の60度くらいの高さを見ていただくと、かたまりのような



ぼんやりとしたものが見えると思います。そんなに明るく光っていませんから、街中よりもできれば明かりのない星が良く見えるところで探したほうが見つけやすいです。よく目を凝らしてみると、5から6個の星々が見えてきます。これが「すばる」です。

「すばる」は若い星の集まりです。若いといっても、年齢は1億歳くらいと考えられています。私たちにとっては気の遠くなるような時間ですが、星としてはまだまだ若いのです。宇宙が悠久の世界であることを感じさせてくれますね。

佐治天文台長 香西洋樹の「空の向こうの物語」

Vol.11 元旦

明けましておめでとうございます。どうぞ、本年もよろしくお願いします。誰でもが取り交わす新年のあいさつです。元旦の夜明けには、多くの人々が新年の初詣に社寺仏閣に参詣します。ところで、「元日」と「元旦」とではどう違うのでしょうか。字を分解して考えてみましょう。「元日」とは、字の通り「元=最初」の日のことであり、一方「元旦」とは元日の日の出のこと。旦の字は地平線または水平線を表す一の上に太陽である日を書きます。まさに日の出のときを表わしますね。漢字の面白いところだと思いませんか。

ところで、今年の干支は丁亥。正確には、十干十二支のことで、「甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸」の十干と「子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥」の十二支の組み合わせで決まる順番のことです。組み合わせは60通りで一巡りしますので、61年目で生まれた年の干支に返ることから還暦と呼ばれます。十二支にはすべて動物が当てられています。星座にないのはどれでしょうか。考えてみるのも楽しいものです。

StarWorld
見上げてごらん